

## —編集後記—

会員および読者の皆さま、初めまして。私の専門は、土壌学、土壌化学（に加えて最近では土壌教育も少しかじっている）ですが、昨年4月より編集委員を担わせていただくことになりました。任期中は、よろしくお願いたします。

さて、「土壌の物理性」第144号はいかがだったでしょうか。本号は、昨年つくば市で開催された2019年度土壌物理学会第61回シンポジウム「土壌・水環境のサステナビリティとコロイド界面現象」を特集いたしました。本シンポジウムにおいて、私は、大変恐縮ではありましたが、筑波大学の小林幹佳先生とともに総合討論の座長を務めました。専門的な質疑は小林先生にお任せし、私は門外漢の立場から、興味の赴くままに講演者の先生方に質問を投げさせていただきました。その模様は、総合討論の記事で確認できますので、ご覧いただけますと幸いです。

総合討論の終盤、会場から講演者が用いる「団粒」の定義についてご意見がありました。研究者が各々の「団粒」のイメージを持つため定義が不明確である、「団粒とはなにか」について共通理解を深めていくべきというご指摘で、個人的に強く印象に残りました。私は以前、小中学校の先生方に土のイメージをお聞きす

ることがあったのですが、先生方は、岩石や鉱物が砕けてできた大小様々な大きさの「土の粒」（無機的な土の姿）をイメージすることは出来ても、植物や動物などの生物が関わり、形成する有機的な土の姿、すなわち「土壌団粒」をイメージすることは難しいとのことでした。これは、現行の教科書においては、無機的な土を取り上げるに留まっていることが要因の一つとしてあげられます。私は、子どもたちが環境問題や食糧生産に興味を持ち、それらと土との関係を理解するとき、生物と関連した土の姿をイメージして欲しいと考えています。そのためには、土の調査や研究に従事する専門家が、教育現場において、積極的に多様な土の姿を示していく取り組みが必要です。

「団粒とはなにか」は、今後のシンポジウムのテーマにもなり得る重要な問いであると感じました。多種多様なフィールドを調査や研究の対象とする土壌物理学会において、子どもたちに伝えたい土の姿といった視点からも「団粒」の議論を進めていただければと思います。

赤羽幾子（編集委員）

### 土壌物理学会

事務局構成	会 長	足立 泰久	筑波大学 生命環境系	
	副 会 長	小林 政広	森林研究・整備機構 森林総合研究所	
	事務局長	山下 祐司	筑波大学 生命環境系	
	庶務幹事	小島 悠揮	岐阜大学 工学部	
	編集幹事	朝田 景	農研機構 農業環境変動研究センター	
	会計幹事	西脇 淳子	茨城大学 農学部	
	会計監査	吉川 省子	農研機構 農業環境変動研究センター	
	編集委員会	委 員 長	岩田 幸良	農研機構 農村工学研究部門
			江口 定夫	農研機構 農業環境変動研究センター
		委 員	赤羽 幾子	農研機構 農業環境変動研究センター
飯山 一平			宇都宮大学 農学部	
片柳 薫子			農研機構 農業環境変動研究センター	
久保田 富次郎			農研機構 農村工学研究部門	
小林 幹佳			筑波大学大学院 生命環境科学研究科	
佐野 修司			(地独) 大阪府立環境農林水産総合研究所	
鈴木 克拓			農研機構 中央農業研究センター (北陸研究拠点)	
高橋 智紀			農研機構 東北農業研究センター (大仙研究拠点)	
釣田 竜也			森林研究・整備機構 森林総合研究所	
常田 岳志			農研機構 農業環境変動研究センター	
橋本 洋平	東京農工大学大学院 農学研究院			
深田 耕太郎	島根大学 生物資源科学部			
淵山 律子	農研機構 九州沖縄農業研究センター			
百瀬 年彦	石川県立大学 生物資源環境学部			
渡辺 晋生	三重大学大学院 生物資源学研究科			